【山田氏】

山田でございます。今日はよろしくお願いいたします。

私のタイトルは、ジェイ・サープ学生調査の新たな展開ということで、大規模学生調査研究から、教学 IR という意味も含めまして、教学 IR ツールとしての活用ということでお話しさせていただきたいと思います。本日の発表内容は、５つに分けておりますけれども、主に私はこのジェイ・サープの歩みについてお話させていただきます。ジェイ・サープは、研究からスタートしてようやく来年度から本格的にひとつの事業という形で進めていくことになります。それにつきまして、このジェイ・サープというのは学生調査だけを意味しますが、学生調査が教学 IR のツールとしてどのように使われるかというのは、後ほど杉谷先生と木村先生からお話をしていただくことになるかと思います。

教学 IR に焦点を置きますと、やはり教育の質の保証ということがカギになってくるかと思います。そのために何をすべきか、ということです。そういたしますと、たとえば、現在、質保証と学習成果志向の高等教育政策については、本日ご参加の先生方、あるいは職員の皆様方が日々実感されていて、そのために何をしていかなければいけないか、毎日悪戦苦闘されているのではないかと推察いたします。これは日本に限ったことではなくて、欧米諸国も、そして、昨日ソウルに三日、香港に二日いて昨日の夜に戻ってきたばかりですけれども、特にエマージングカントリーと呼ばれていますマレーシア、インドネシアを中心といたしまして、まさにこうした質保証は、世界的にひとつの高等教育政策の特徴であるかと思います。その中で何をしていかなければならないかということなのです。そうすると、たとえば欧米諸国では、チューニングというプロジェクトが広がっているかと思います。これは今日ご説明する時間がございませんので、そういう動向だけをお知らせしたいと思います。それから実際に 17 ヵ国、250 機関が参加いたしました、AHELO Feasibility Study の参加者は国境を超えて 23,000 人くらいになりました。アメリカにおきましては本当に大変なことで、2015 年から PIRS(Postsecondary Institutional Ratings System)というものが稼働いたし

ます。これは卒業率、そして、就職してどれくらいの給与をもらっているかの学生の動向を追っかけながら、そういう中でどの大学の質がよいのかをレイティングしていこうという、ひとつのデータベースでございます。それから、日本では日本学術会議による分野別参照基準が策定されたり、そして、まさに日本におきましても大学ポートレートは稼働しております。特にこちらの方は、私立大学、今日は私立大学の先生方、職員の方が多いかと思いますが、国公立大学より先だって、私学事業団のデータベースである大学ポートレートの私学版が稼働したばかりではないかと思います。そこで質保証に向けて、これを今申しあげたように枠組みで見てみます。日本の機関レベルでいうと、プログラムやカリキュラムの整備、多様な学習成果の把握方法、あるいは、国レベルでは、今言った日本学術会議による分野別参照基準が策定されたり、AHELO Feasibility Study に参加したり、そして大学ポートレートが稼働するというようなことがあります。トランスナショナルレベル、これはチューニングプログラム、AHELO などがございますけれども、こういうものが相互に関連し合っているのが今の現状ではないかということです。そこで、たとえば、質保証と教学という点に焦点を当てますと、こういうサイクルで回っていくのではないかというのを図示してみました（スライド６）。

ここで、教学と IR の関係ですけれども、IR は一般的な定義といたしますと、個別大学内のさまざまな情報を収集して数値化・可視化して、評価指標して管理して、その分析結果を教育・研究、学生支援、経営といった所に活用するというような活動になります。

日本では、たとえば評価対応としての IR、国公立大学を中心として進展してきたものですし、内部質保証としての教学 IR など、これは全国的に設置形態を超えて広がっているかと思いますが、そういう形で現在進展しているところであるかと思います。

そうすると当然、質保証の一環としてデータを活用することが必要になってきます（スライド７）。その時に、たとえば、色々なデータがあるかと思いますけれども、先ほど沖先生の方で学生生活調査とおっしゃられていました。そういう意味では、学生

調査というのは、学生の学習成果というものを間接的に評価するというような性格を持っています。それをもとに色々とこのように使えるわけですけれども、あとこれを活用することでカリキュラムの見直しや教授法の見直し、またプログラムなどを作っていくということにもなります。それが教学 IR というようなコンセプトではないかと思います。

そういたしますと、学生の学習成果を評価する、いわゆるアウトカム・アセスメントですけれど、これを２つのパターンにモデル化したのがこちらになります（スライド８）。マクロ、大学全体、学部、プログラムを評価する場合と、ミクロ、教室内・授業を評価する場合を見ますと直接評価と間接評価に分かれます。直接評価はダイレクトに評価するものですから、標準テスト、TOEFL、TOEIC などもございますし、今非常に広がりつつあるルーブリックなども、パフォーマンスを評価するわけですから、直接評価になるかと思います。間接評価の代表的なのが、今申しあげた学生調査です。ミクロの方も色々な形があり直接評価のマクロと重なりますけれども、教員であればレポートとかテストといったものを対応しておりますでしょうし、ルーブリックとかポートフォリオなども使っているかと思います。間接評価の代表的なものは授業評価というものになるかと思います。

こういうような質保証の色々な仕組み、あるいは、政策ということを頭に入れていただいて、ここからはジェイ・サープの歩みについて触れたいと思います。ジェイ・サープは、元は JCIRP というアルファベットで使っておりましたが、研究として行ってきたものでございます。いわゆる学生の成長を測定する間接評価として、これを開発しようというところから始まりました。その時の特徴というのは、日本ではあまりこういう考え方は当時なかったのですが、アメリカで蓄積されてきた大学の影響で、カレッジ・インパクト研究の流れをベースにして、アスティンという私の先生の一人でもありましたが、この先生のモデルである I－E－O（既得－環境－成果）モデルに依拠しながら、大学生の教育効果・成果について検討してきたということであります。その際に、当時日本では個々の色々な大学で学生調査をされておりましたが、それは

ある意味で標準的なモデルではないですから、私どもが考えたのはやはり先行知見の多い国アメリカの学生調査と互換性のある調査を開発して実施してまいりました。2004 年から始めていますが、約 10 年かけて基盤研究（B）そして（A）という形で続けてまいりました。こちらにおられる先生方も当時からこの研究に参加して下さっていたということで感謝の念に堪えないところでございます。2010 年と 2013 年は、後で木村先生がご紹介されるように、なんとか参加してくれる大学のために使っていただくような何かを開発しようということでスタートいたしました。それがデータベースであったわけです。

もうひとつ大事なのは、私は研究や実践が日本の国内つまりドメスティックで終わっていて、国際比較をして日本の立ち位置を、学生たちの立ち位置を検討しなければいけないという問題意識を持っておりました。そういう意味で国際比較がこの研究で行われてきたわけです。ですから、ひとつは日本における学生調査による大学のアウトカム・アセスメントの実現と、もうひとつは日米韓を中心としたアウトカム・アセスメントの国際比較です（スライド 12)。これを相互に関連しながら続けてきたということになります。

そういう意味では、まず代表的な全米規模のアセスメントがありまして、これは大学生調査（CSS)、そして新入生調査（CFS）でございましたけれども、これを 2004 年からは大学生調査（JCSS）と日本版に変えて、もちろんアメリカからの色々なものを比較できるような調査でしたが、段々と日本の大学生の実態にあわせて独自に改良してきたものです。新入生調査、そして短期大学生調査というように３つに増えてまいりました。

これが JCIRP データでございますけれども、2013 年までにインスティテューションレベルでいいますと、670 大学、13 万人くらいが参加しておられますけれども、学部単位で申し込んでいただいていますので、実際には 850 学部以上が申し込んでおられます（スライド 14)。

一番早く事業化したのがこちらでございます（スライド 15)。これは短期大学生調

査ですが、こちらは独立事業として発足しております。短期大学基準協会の中に学生調査委員会というのがありまして、個々の事業として今年度から独立した形で実質化しております。そうするとジェイ・サープは何をするのかというと、個々のデータなどを使いながら研究をして、それをフィードバックしていこうというような機能を持たしていただいております。

たとえば、スライド 16 に質問項目のサンプルがございますけれども、大学生調査のサンプル、一番わかりやすいのは 1 週間の活動時間です。それから新入生調査のサンプルは高校時代の学習行動といったものを聞いておりました。

ここでは、学生調査結果を少しご紹介したいと思います。これは 2009 年と 2008 年の新入生調査を比較したものですけれども、学習時間が段々と減少していると、そして少ない読書時間などといった現代の大学生の実像といったものが全国調査であるジェイ・サープから浮かび上がってまいります（スライド 18)。

こちらは、学習成果の自己評価でして、アメリカと日本が比較できる項目でございます（スライド 19)。アメリカ 2005 年と日本 2005 年、2007 年、2010 年というようになっておりまして、ほとんど変わりがないのが日本で、かなり低いように見えます。しかし、一見そう見えますが、これは国民性の違いもあって、アメリカ人はポジティブに評価するかもしれませんし、日本人は非常に謙遜して評価するというのが表れているかもしれません。

しかし、これを日本だけに限って見たらずいぶん違ってまいります。この 2005 年から 2010 年のデータを見ますと、ジェイ・サープは一回きりの参加で求めておりますので、2005 年に参加したところが 2007 年に参加するとも限りませんし、2007 年だけ参加する、あるいは 2005 年と 2010 年に参加するなど、色々なパターンがあります。色々なパターンがあるので、その参加大学の参加学部のキャラクターが違うにしろ、やはり同じような傾向が見えるのです。そうすると、やはり日本の大学は学生を中心にして、たとえば学生の分析や問題解決能力を上げるとか、そういうことに多くの先生方が一生懸命努力されてこられたと思います。リーダーシップの能力は、2005 年と比べ

ると 2010 年の方が、やはり中教審で言われている学士力に関連した項目というのが上がってきているということになります。これが今申しあげたところであります。

そうすると、なにが上昇させている要因なのかを考えると、アクティブ・ラーニングの効果があるのではないかと考える次第であります。今日はそこまでお見せいたしませんけれども、実際にはアクティブ・ラーニングと学習成果の相互関連性というのは実証されております。

こちらは、もうひとつ違う切り口で見た時の専門分野別能力の向上というところです（スライド 22)。人文系、社会系、STEM 系といったところで見ると、やはりその分野によってかなり違っています。専門分野に関してはそれぞれが一番高く獲得している項目がありますが、STEM 系では異文化ですとか、いわゆるグローバル化した中でほかの国の人たちと交流するといったところはまだまだ低いことが見えてきます。

今度は、日韓の学生の違いというのを見たいと思います（スライド 23)。これはモデルですので、こういう感覚で分析をしておりますが、随分違いがあります。実は先ほど私がなぜ国際比較をしなければいけないかということを申しあげたのは、本当にアジアの大学の改革度というのは日本を上回るスピードで進んでおります。たとえば、韓国では今 80%の大学にセンターフォーティーチングラーニング、いわゆる学習教育開発センター、学習支援センターと呼ばれる組織が設置されていて、いわゆるアクティブ・ラーニングを大学の中にどのように導入して使うのかという研究も実際にされています。それがあらわされているのがグラフ（スライド 24）にあります。日本では従来からクラブやサークルなどの参加率が高い。これは、学生文化というものが日本の特徴だと思います。また、単位などを修得できなかった授業の経験は、日本の学生が多い。一方で、韓国は就職ということを非常に意識して、なかなか就職が難しいので、大学の中や正課外でリーダーシップ養成やキャリア開発訓練が充実しております。そうしたところへの参加率が高いのが、グラフから把握できます。それだけ、実際の学習成果でもかなり韓国の学生は学習時間も長かったり、学習成果が身についたと答えている率が高い一方で、ネガティブな経験度がものすごく高いのも韓国の学生です。

日本が唯一高いのは、授業をつまらなく感じたというところで、これはちょっと反省材料になるのかもしれませんけれども、プレッシャーを感じてカウンセリングを受けている学生の数が非常に高いのが韓国であります。日本の方はそうでもありません。このように私どものジェイ・サープによる国際比較から日本の立ち位置についても、把握できています。

ただ、わたくしどもは、研究と教育というのは相互作用があることによって、たとえば学生調査なども質が高くなってくると考えてまいりました。継続的な調査をすることで安定性というものも確保できるなと考えてきたわけです。ここにあるように１番、２番というのはすでに申しあげたと思います（スライド 28)。３番のところですが、私どもの意図するところは、日本で標準的に使っていただけるような学生調査を浸透させたいというところであります。そうすると、項目間の整理から標準調査作成の基盤を作ることが大事になってまいります。

そこで、最後の３つ目ですけれども、項目の有効性と妥当性の検証というのを私どもが毎年行ってきたことであります。この項目を精査して、回答項目の低い項目の削除や日本版項目の付加、尺度の見直し、ということで標準化調査の作成をしてきて、その大規模データと項目整理という課題に備えてまいりました。そこの中で、あとで木村先生の方からご紹介されるような使いやすいデータベース、学生調査に関するデータベースというものができあがってきたことであります。

こちらは何かというと、継続すると変わらない項目があります（スライド 30)。変わらない項目、つまり、参加している学生が大学によって違っていてもあまり年々で変化のない項目というのがあります。たとえば、自己評価、価値観とか情緒性に関した項目というのは、母集団が異なっても変化がなく、かなり安定しております。そういうところでこういう項目を今回の 2015 年からは少し削除して、新たな質問紙を作っているところでございます。

それでは、ここは更なるステップとして研究と実践のインタラクションというのは、このようなサイクルで行われていきます（スライド 31)。私どもこのジェイ・サープ

というのは研究としてやっていかなければ、参加して下さっている大学様にお返しすることができません。つまり、日々研究の進展をしていかなければ、参加して下さる大学様に良いデータなどのレポートなどもお返しできないのではないかと考えているところであります。

そういう所で JCIRP から JSAAP へと言葉が変わりました。実際にはカタカナでジェイ・サープと呼んでおりますが、新たな展開へと踏み出した次第です。JCIRP、これは Japanese Cooperative Institutional Research Program というような名称でございましたけれども、JSAAP の方は Joint Student Achievement Assessing Project という名称でございます（スライド 33)。これは大規模な調査であるけれども、共通して標準的に大学が使っていただけるというような意味であります。新入生調査といつでもできる大学生調査と２種類があります。質問項目の削減と日本の大学の実情に合わせた項目を厳選いたしております。有料による学生調査サービスではありますけれども、学生調査だけに限定したサービスです。そのサービスの内容というのはここに書いたようなものでございまして、データベースを利用して学生の状況が把握できる。簡易レポートの排出と利用。そして、これは学内委員会の対応がしやすいというようなレポートがそのまま使えるというような機能を持っております。そのような形で、ようやく開発段階が終わったというようなところでございました。これについては、もっと詳しい個別の使い方、そして、どのように使えば有効であるかというのは杉谷先生、そして木村先生の方からお話があるかと思います。

どうもご清聴ありがとうございました。